

神話の地  
熊野と  
神剣「劔霊剣」  
ふつのみたまのつるぎ

# 日本人の 肚魂の 創り

（「柱」にふさわしき現代の武人

日本では神を数える際、「一柱<sup>ひとはしら</sup>、二柱<sup>ふたはしら</sup>、三柱<sup>みはしら</sup>」と唱えるように、「柱」の言葉を用いている。大ヒット漫画『鬼滅の刃』でも、鬼殺隊の中で最高位とされる9人の剣士を「柱」と呼んでいるが、現代において最も「柱」と尊称したくなる武人の一人が、荒谷卓<sup>あらや たくし</sup>師範である。

自衛隊特殊作戦群初代群長、明治神宮武道場「至誠館」館長と、稀有

熊野飛鳥むすびの里  
荒谷流武道

## 荒谷卓

長年にわたり空手、鹿島の太刀、合気道などを修めきた荒谷流武道・荒谷卓師範。「戦うこと」、そして「守るべきもの」の本質を誰よりも真剣に考え抜いてきた現代の武人である荒谷師に、武の道探求の末にたどり着いた場所、日本人の神性と日本武道の境地について尋ねてみた。

取材・文◎本誌編集部

Araya Takashi

荒谷 卓 昭和34年秋田県生まれ。東京理科大学卒業後、57年陸上自衛隊に入隊。陸上幕僚監部防衛部、防衛庁防衛政策局戦略研究室勤務の後、米国特殊作戦学校への留学を経て、帰国後に特殊作戦群初代群長となる。研究本部研究室長を最後に、平成20年退官。一等陸佐。21年明治神宮武道場「至誠館」館長に就任。30年国際共生創成協会「熊野飛鳥むすびの里」創設。農、武、学を通じて日本文化社会の国内外への普及活動に取り組んでいる。令和4年「日本自治集団」創設、代表に就任。著書に『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ!』（共に並木書房）『日本の戦闘者—現代のサムライは決してグローバリズムに屈せず』（ワニ・プラス）など。

な武の道を経て、現在は、初代天皇・神武天皇の建国を描いた「神武東征」の舞台の一つである神話の地・熊野にて、「熊野飛鳥むすびの里」を開き、「荒谷流武道」を伝える荒谷師。この度、同地を訪れ、「武道と神性」についてお話を伺った。

（武道と発心

気盛んであった荒谷師はそれだけでは飽き足らず、当時住んでいた千葉県流山にある極真空手の道場にも入門。そこでは松井章圭現館長とともに加藤重夫師範代から薫陶をうけたという。大学では極左学生との一悶着などもあり、先を心配した教授から、明治神宮至誠館の島田和繁師範を紹介され、至誠館にも通い出した。島田師範より「お前は軍人の顔をしている」と勧められたこともあり、大学卒業後、自衛隊へ入隊。地方への赴任の際は一人稽古を重ね、銃剣道や徒手格闘術も学んだ。東京へ戻ってからは全自極真支部の代表を

務め、そして再び、至誠館にて鹿島神流と合気道を学び修めていった。自衛隊退官後は、請われて至誠館館長に就任。10年間務めた後、「日本のために自ら為すべき武道の実践」のため、7年前に三重県熊野に移住し、現在に至る。

（にぎにぎしさと猛々しさ

さて、「スピリチュアル」と言うの特異なものと考え方もいるかもしれない。しかし荒谷師からすれば、神性とは「日本の伝統や本質の柱」であって、日々の営みが「神とともに在るもの」なのだという。朝起きて神棚に拝礼し一日が始まるというように、神の子孫として神を祀り、神とともに生活していく。

「武道もその延長であって、熊野での農武一体の生活は、神」を非常にリアルティを持って感じられる気がします」と荒谷師は語る。

荒谷師は自身の武道実践のための場所を30年前より探し続けてきたという。関東一円から山梨、長野、静岡、福島と良い場所があると聞けば訪ねたものの、自然豊かなところが多々あれど、神を感じる場所にはなかなか巡り会えなかった。だが熊野を訪れたところ、一発で神々しさが感じられ、すぐにこの地に誘われた。「神武東征」より前の古代から、熊野は伊邪那美命の墓陵として祀ら

1

師霊道場

3

2

①むすびの里の1万坪の敷地に建つ畳130畳の武道場。道場名は神武東征神話にちなんでいる。②神剣が祀られた神棚の前にて、荒谷師と荒谷流武道免許の古川広幸師。③神武天皇の言葉「八紘（あめのした）を掩（おお）ひて宇（い）え」と為（せ）むに由来する「八紘為宇」の書画。



道場外観



夢見所



保食（うけもち）の館



チャレンジコイン

①道場外観。②35畳の大部屋から和洋室の小部屋を備えた2階建ての宿泊場。③囲炉裏の座敷や櫂のカウンター等、約100名が同時に食事を摂れる厨房付き食堂。④保食の館には、荒谷師自衛隊時代の多くの勲章や、世界中の軍関係者から敬意を込めてプレゼントされたチャレンジコインなども多数飾られている。







## 抜刀術

荒谷流武道における肚から行う抜刀術。同じ踏み込みからもその後の体捌きで軌道が逆になるなど、玄妙な体と刀遣いが見て取れる。



## 組太刀

組太刀における「つける」技法。気合いとともに木刀を組み交わすとともに、そのまま入身して相手を崩し倒す。



現代の宇宙科学で言うと、神産巢日神はブラックホールのような存在であり、それは「エネルギーの限りない集中」である。するとそのエネルギーが集まったところが中心となる。続いて、ビックバンのような大爆発により宇宙が拡散されていく。あるいは太陽系の真ん中に太陽があり、そのエネルギーで惑星が周回しているように、そこから「エネルギーが出てくることもまた中心」となる。

「つまり、物事の中心とはどこか、その位置を指し示しても意味はなく、そこに集まるか、そこから出るか、その根元をもつて『中心』と呼ぶわけです。しかも日本人の理解では、『集まるも出るも同じだ』としているのです。これが宇宙創元の理であり、武術で言えば、肚に力を集めれば自然と力が出るということになります。だから力を出したければ、一旦集めなければなりません。それ

が丹田に対する気の集中です」  
肚（魂）が確立された時、「私がいるここ」こそが、他のどこでもなく、世界の中心となるのだらう。  
さて、世界の軍事技術にも精通する荒谷師は、現在最もグローバル化が進んでいるのがミラタリーの分野であって、日本の剣のような民族固有の武器が現存するところは他に

## 音と気合い

また、剣とともに弓矢も古くから神器として用いられてきたが、鳴弦（めいげん）の儀や鎗矢（やぶや）など、そこで重要となるのが「音」である。  
「私も神事の際は基本的には樋（ひ）のある刀を使つて音が鳴るようにしてい

ます。音を出すという作法が神に通じる儀礼なのです」

神社で振るわれる「幣（へい）」も、鈴の音も、神へと音を伝える同様の所作であり、武道における気合いもその一種とも言える。

鳥船では『エイエイ、エイホッ、エイサッ』との気合いをかけて行われる。実際に櫓を漕いで船を進める際には、進み始めは力が要るので『エ

イエイ』、巡航速度となつたらバテてしまわぬよう『エイホッ』、最後はラストスパートで再び『エイサッ』と力を込める形となるのではないかと、荒谷師は語るが、

「鹿島神流の型でも櫓など、エイ・ヤー・トートーと、『音で覚える』と習いました。力んではいけないところと、渾身の力で極めなければいけないところと音が見事に一致して

いて、まさに理に適っていることを実感しました」

## （神人合一の道

荒谷師の教え子たち、道場の隅で駄々を捏ね母親から怒られていた当時小学生の子供も、7年経つと今や高校生となり、小さな子供達の面倒まできちんと見るようになったという。自分の成長はなかなか自分では感じられないものの、子供たちの成長ぶりには目を見張るものがあると、嬉しそうに荒谷師は語る。

「この間（11月3日）、飛鳥神社例大祭社で奉納演武を行った際、中学一年生の子の基本太刀の受けを私がとつたのですが、受けていて、国井善弥先生の太刀みたいに見えてくるんですよ！ 体が立派なのもあるけど、これがまたピシッと極まっているんです。『あー、良かったな』と思いましたね……」

元々、日本の教育とは模範と模倣である。教える側がきちんとした模範を示し、習う側はちゃんと真似しなければならぬ。真似るとは相手を映すことであり、その人になつていくということである。かつては「どうすれば武甕雷の秘太刀となれるのか」荒谷師も真剣に考えたという。そして、「大宇宙の原理を悟り、肚を鍛え気を練り、自らが小宇宙と成

ないと語る。鹿島の太刀にしろ元々は秘太刀である通り、時に戦に使われることもあったにせよ、日本人にとって剣は、邪を祓うための神器であつた。

「ですから、稽古においても自らを禊ぎ、邪を祓つていくつもりで剣を振ります。そこに憎悪を込めてはいけません。合気道の植芝盛平先生も『まず神と合気して、後に人に向かつて合気する』とおっしゃっていますよね。相手を投げるにしても、自分の立場としては、神として相手の邪気を祓っているわけです。そして実際にそのような素晴らしい技をかけられると、ハッと目が覚めるような思いが得られるのです」

技の体系以前にある思想が全て技に現れると荒谷師は語る。「相手を根絶やしにしてやろう」と恨みつらみを買うような技ではなく、荒谷流武道では、稽古をして清々しい気分になれるものを理想としなければならないのだ。

ることが、武道を通じた神人合一となる」という考えに至つた。

ヨーロッパでの信仰では、神は自らの外にあるものと考えられている。しかし、日本では神性は自らの内にあるものなのだ。

神としての素養を学び、汚れを禊いで、邪を祓い、内なる神性を磨き、神に近付こうと発意し、努力する。そして、自らが神と同化し、神となつていくのである。

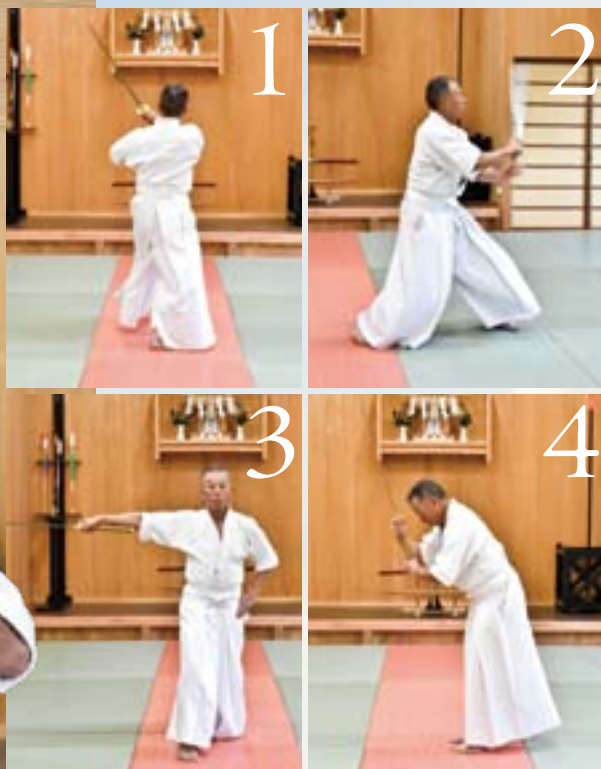
その道とともに歩むための師と仲間たちが、神話の地・熊野のむすびの里にはいた。 ■

## 鳥船

鳥船命とは武甕雷神が大事な交渉に行く際に同行された神。非常に重要なところに行く際に勇気を与えるもの。流儀の前には「すべての神様よ、ご覧になってください。自分が勇気を出してこれからやることを」と歌いながら気合いとともに鳥船を行う。



## 四方祓の儀



荒谷師の神剣・節霊剣による四方祓の儀。東西南北の邪気や魔を祓い清めていく。